

マサバ (対馬暖流系群) ①



■ マサバ対馬暖流系群の現在の状況

マサバは北太平洋に広く生息しており、本系群はこのうち東シナ海～日本海に分布する群れである。

図1 分布図

分布は東シナ海南部から日本海北部、さらに黄海や渤海にも及ぶ。

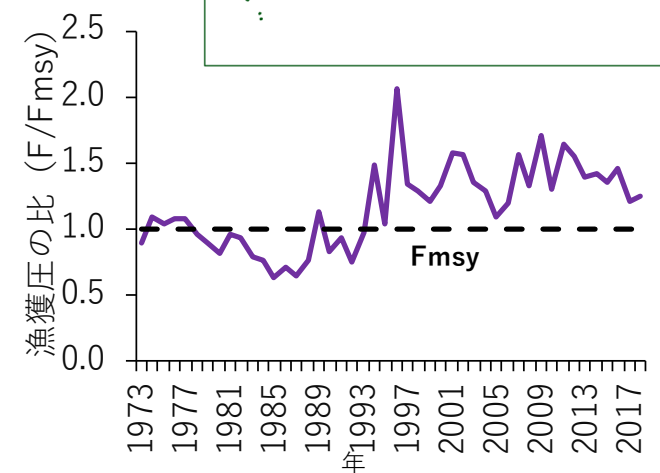
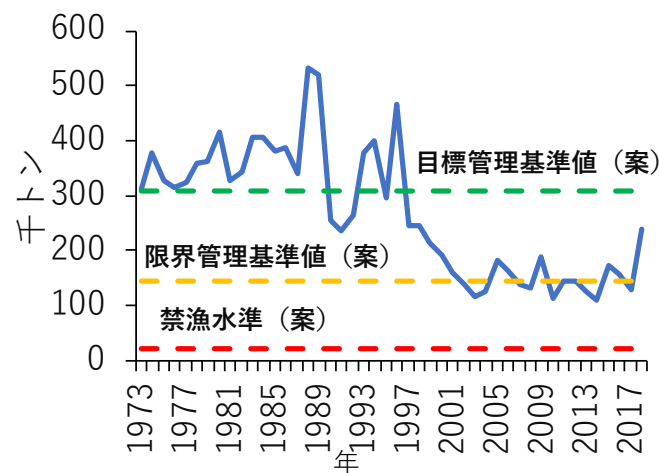
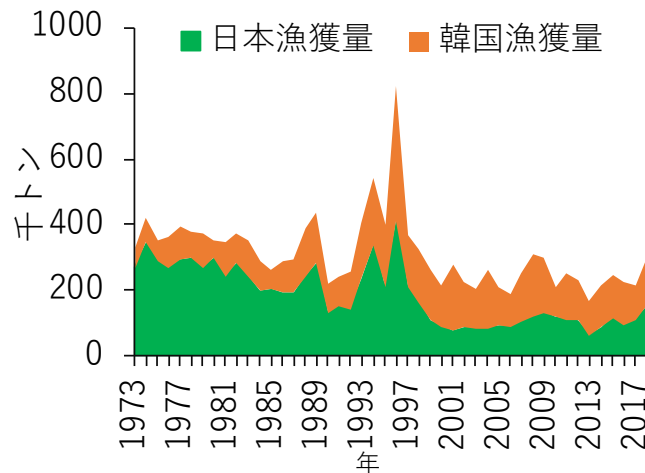


図2 漁獲量の推移

我が国の漁獲量（緑色）は、1970年代後半には300千トン前後であったが、2000年以降、概ね80千～120千トンの低い水準で推移。2018年の漁獲量は151千トン（日韓合計292千トン）。

図3 親魚量の推移

親魚量は、1990年代までは概ね300千トン以上で推移。2000年代以降は200千トン以下で推移していたが、2018年は238千トン。

図4 漁獲の強さの推移

本系群の漁獲圧（F）は、2000年代以降横ばい傾向で推移。

管理基準値、禁漁水準および漁獲管理規則については、7月に開催された資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）に提案したものである。その後の資源評価の更新を反映して本資料を作成した。

マサバ (対馬暖流系群) ②

■ 年齢別資源尾数と神戸プロット

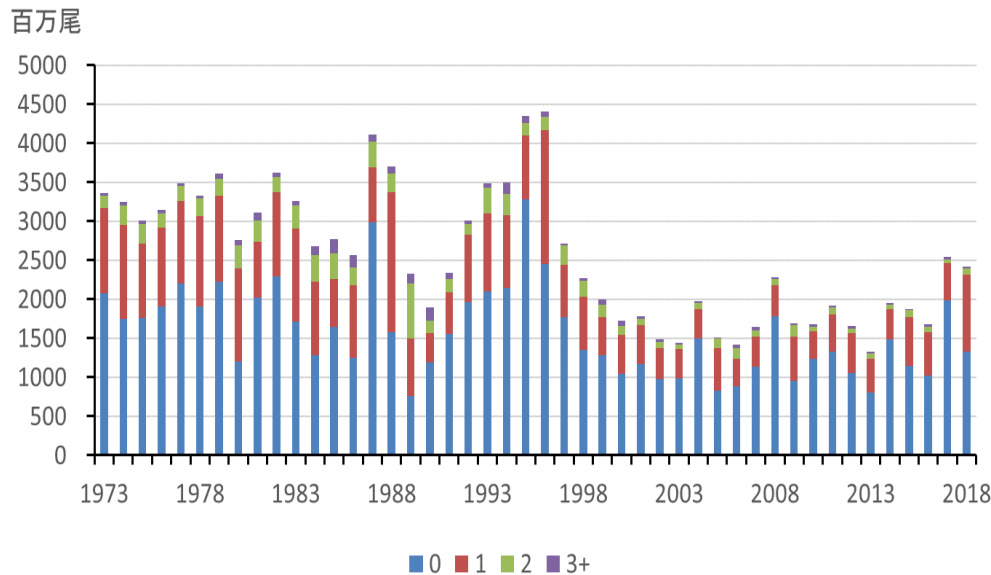


図5 年齢別資源尾数

大部分は0歳（青）、1歳（赤）で構成される。1990年代後半から2000年代前半にかけて加入量（0歳の資源尾数）が減少し、その後横ばいから増加傾向にある。

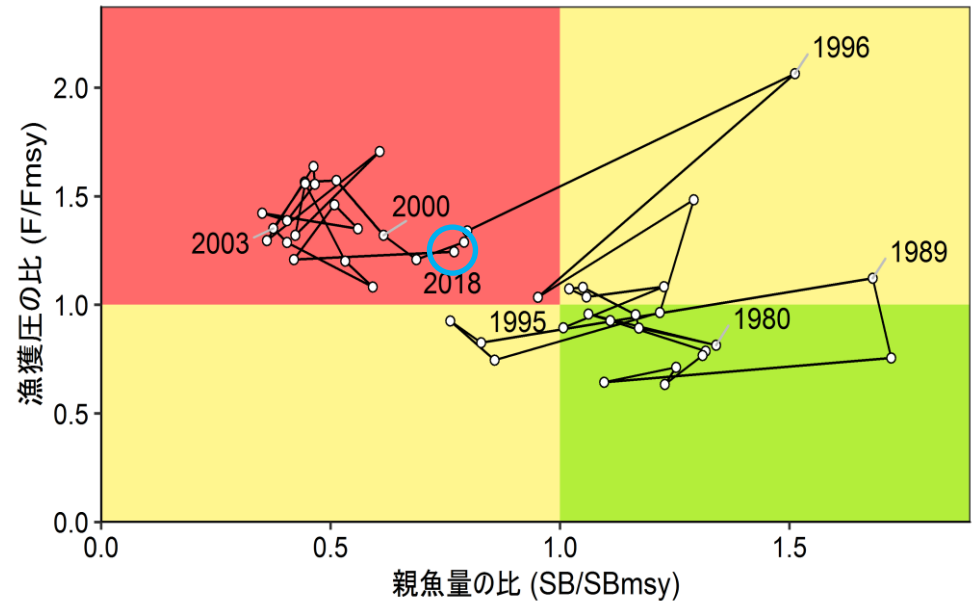


図6 神戸プロット（神戸チャート）

漁獲圧（F）は、1980年代には概ね最大持続生産量を実現する漁獲圧（Fmsy）を下回っていたが、1994年以降はFmsyを上回っている。親魚量は1980年代には最大持続生産量を実現する親魚量（SBmsy）を上回っていたが、1997年以降はSBmsyを下回っている。

マサバ (対馬暖流系群) ③

■ 管理基準値案と漁獲管理規則案等

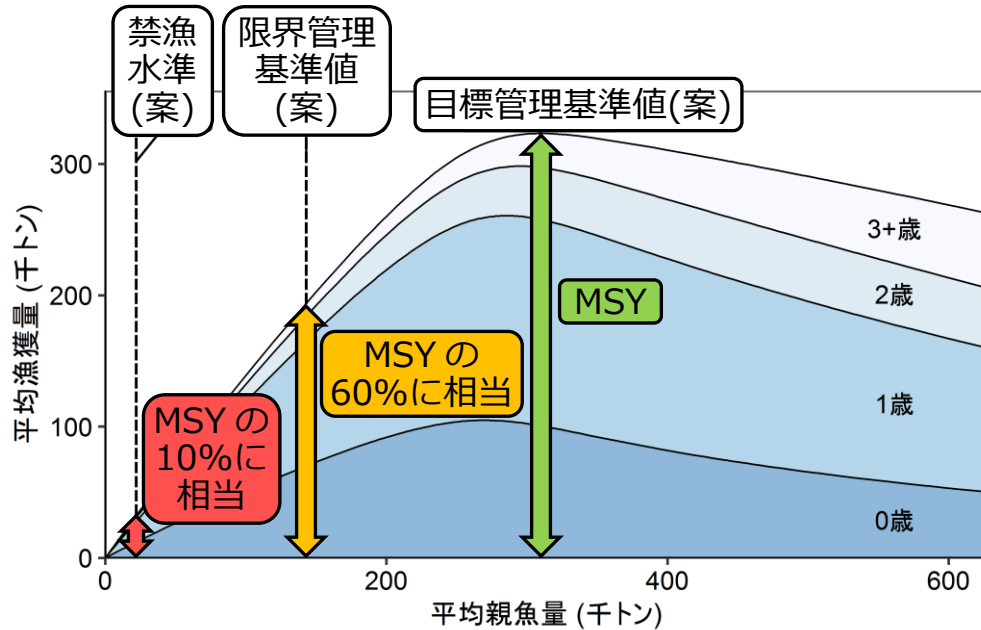


図7 MSYと管理基準値案の関係

本系群の目標管理基準値としては最大持続生産量（MSY：323千トン）が得られる親魚量（SB_{msy}）を、限界管理基準値としてはMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量を、禁漁水準としてはMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量を提案する。

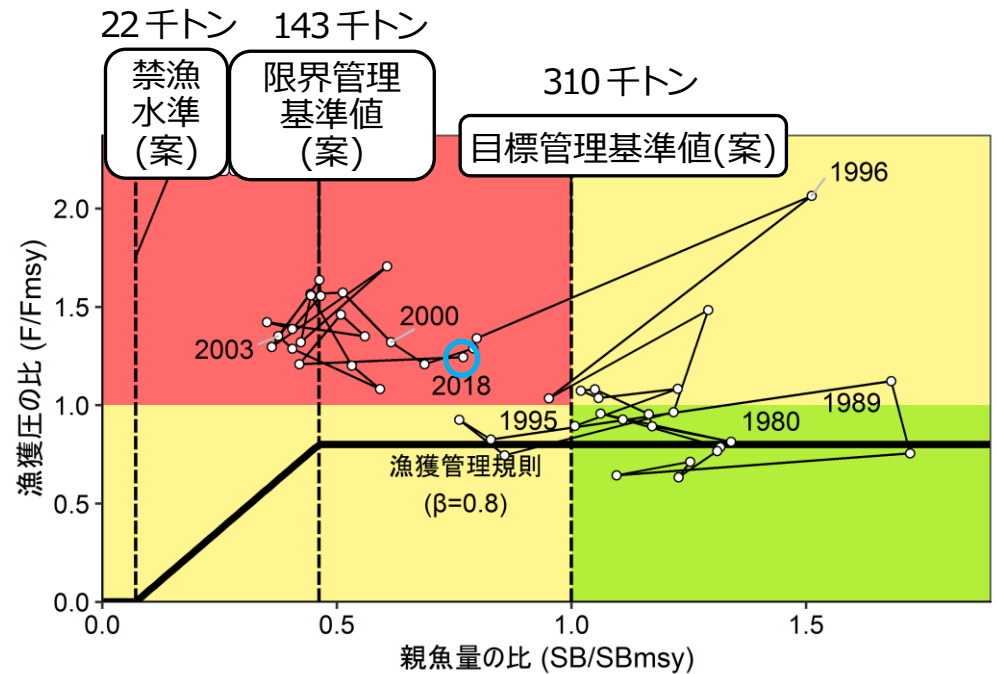


図8 漁獲管理規則案

2018年の親魚量は、目標管理基準値案を下回るが、限界管理基準値案は上回っている。βを0.8とした場合の漁獲管理規則案（※）を黒い太線で示す。2018年のプロット（点）は黒い太線よりも上側に位置するため、2018年のFは、当該漁獲管理規則案に基づくFを上回っている。

※βや漁獲管理規則案については「検討結果の読み方」を参照

マサバ (対馬暖流系群) ④

■ 将来の親魚量と漁獲量の予測

漁獲管理規則案（現状の漁獲圧は参考）に基づいて算出

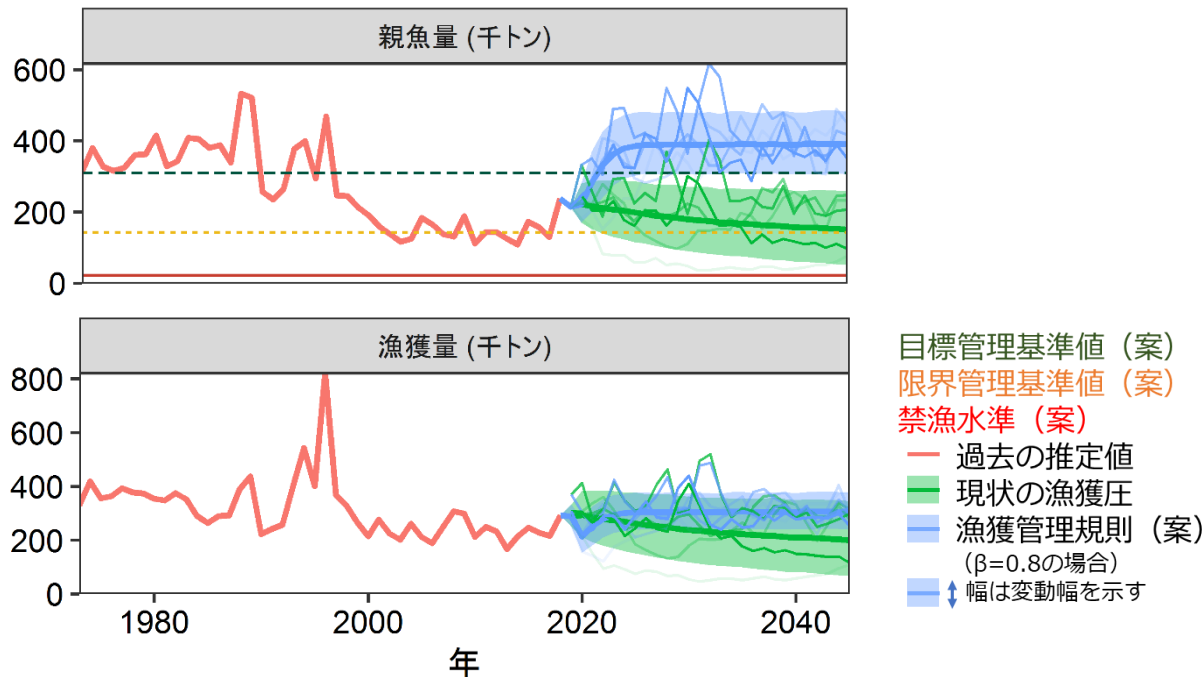


図9 親魚量と漁獲量の将来予測

漁獲管理規則案に基づく、親魚量と漁獲量は平均的には増加し、 β が0.9以下であれば、10年後に目標管理基準値案を50%以上の確率で上回る（表）。また、 β が1以下であれば、限界管理基準値案以上の親魚量が維持される。

シミュレーションによる確率や将来の漁獲量は、資源評価により今後もアップデートされます。

管理基準値、禁漁水準および漁獲管理規則については、7月に開催された資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）に提案したものである。その後の資源評価の更新を反映して本資料を作成した。

表 管理基準値案を上回る確率と2020年の漁獲量

β	10年後（2030年）に親魚量が限界管理基準値（案）を上回る確率（%）	10年後（2030年）に親魚量が目標管理基準値（案）を上回る確率（%）	2020年の漁獲量※（千トン）
1	100%	46%	261
0.9	100%	70%	242
0.8	100%	88%	222
0.7	100%	98%	201
0.6	100%	100%	178
0.5	100%	100%	153

※ この漁獲量は日本および韓国の合計値である。